

農業技術情報

令和6年4月3日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
JA幕別町	0155-54-4118
JAさつない	56-2131
JA帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

1 秋まき小麦の生育状況（定点調査より）

表1 起生期調査の結果（4/3）（幕別町ゆとりみらい21推進協議会 指導部会調査）

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (枚)	生育期節
起生期調査 (平年値)	14.8 (12.9)	1,861 (1,269)		起生期 4月3日(3月30日)遅4日 融雪期 3月28日(3月27日)遅1日
越冬前調査 11月14日	18.1 (15.3)	1,325 (964)	5.6 (5.1)	
作況調査 10月15日	14.8 (13.1)	208 (253)	2.6 (2.4)	出芽期 10月3日(10月3日)±0日 は種期 9月25日(9月25日)±0日

は種期は平年並みだが、越冬前の気温が高く推移したことにより、茎数は平年より多い状況です。茎葉が黄変した圃場は散見されますが、雪腐病や滞水等で冬損を受けたほ場は少なく、総体的に越冬状況は良好です。

2 起生期の窒素分肥について

茎数が確保されているほ場が多いことから、早急に追肥が必要なほ場は少ない状況です。茎数が1,000本/m²を超えるほ場は、幼穂形成期頃まで追肥を行わないことを基本にし、必要な場合は窒素分肥量を2kg/10a程度に抑えましょう。

①は種が遅く茎数が極端に少ない、②湿害や雪腐病で茎数が少なくなっている

など、茎数を増やす必要があるほ場は、ほ場に作業機が入れる状態になり次第、早めに窒素分肥を行なってください。

起生期分肥の要否および分肥量は、茎数の多少に応じて加減します（表2）。

表2 秋まき小麦の窒素分肥例 ※基肥施用窒素分が4kg/10a程度の場合

	起生期	幼穂形成期	止葉期
時期	～4月上旬	4月中～下旬	(5月中下旬見込)
分肥の 目安と 窒素 施用量	茎数 1,000本/m ² 以上 →0～2kg/10a	4～6kg/10a	4～6kg/10a
	茎数 700～1,000本/m ² →2～4kg/10a	2～4kg/10a	
	茎数 700本/m ² 以下 →4～6kg/10a	2～4kg/10a	

過剰な分肥は倒伏による減収の恐れがあるため、茎数が不足しているほ場でも、幼穂形成期と合計し

て8kg/10a以内となるように、起生期は4～6kg/10a程度とします。

3 凍上による根浮き対策について

今年は凍上による「根浮き」は少ない傾向ですが、このようなほ場では、生育が遅れたり枯死する恐れがあります。ほ場の乾燥を待って速やかに鎮圧し生育の回復を図ってください。

《鎮圧の注意》

ケンブリッジローラーによる鎮圧は、過剰な根傷みや茎数の減少を起こす場合があるので避けてください。

4 冬損（雪腐病）発生ほ場の対応について

指導部会定点ほ場では雪腐病の発生は（**紅色雪腐と大粒菌核がみられました**が、ほとんどが**軽微な程度**でした。）茎数が減少しているほ場でも、よほどの場合を除き基本は廃耕の必要はなく追肥での対応となります。

追肥の目安としては、茎数が1,000本/㎡未満の場合はなるべく早く起生期追肥を実施しますが、茎数が1,000本/㎡以上の場合は表2に準じて追肥を検討しましょう。

○春の農作業事故防止

★春の農作業事故は、機上作業中に足を滑らせ落下する例や機械の乗降時に滑り落ちる例、トラックのアオリで手や指を挟む例が多く見られます。

★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。

★衣服の袖口や裾はボタン・ファスナーを止めて、身体に密着させましょう。

★二人以上で作業する時や危険と思われる作業に入る前には、必ず声を掛け合しましょう。